

平成18年度 学位論文

高校生の体育祭で得られる
集団活動獲得感情と学習意欲の関係

兵庫教育大学大学院
学校教育研究科 学校教育専攻
学校心理コース

M05094I

宅 間 渉

問題と目的

現在の学校教育と特別活動

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においては、これからの教育の在り方として、[ゆとり]の中で自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成を基本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ること、一人一人の個性を生かすための教育を推進すること、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育を改善すること、横断的・縦断的な指導を推進するため「総合的な学習の時間」を設けること、完全学校週5日制を導入することなどが提言された。その後、数次にわたる答申に留意しつつ、平成10年に幼稚園指導要領、小学校及び中学校学習指導要領が、平成11年に高等学校学習指導要領が全面的に改定された。しかし、このような[ゆとり]や[生きる力]の育成によって、授業時間や教育内容が大幅に削減され、学校教育の基幹である教科教育に少くない影響があり、改訂の弊害として「学力低下」が社会問題として大きく取り上げられるようになった。そして今日では再び学力に目を向け、「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着」を念頭においた学校教育が展開されている。

学校行事の意義

一方で、「学力低下」が問題となる以前も以後も、学校生活の中で体育祭、文化祭、修学旅行等の学校行事などは従来通り行われている。ゆとり教育や学力低下問題の煽りを受け、規模の縮小傾向はみられるが、従来通り行われているということは、教育方針が変わろうとも学校行事には教育的価値が認められているということであろう。学校行事は高等学校学習指導要領では特別活動のひとつとして扱われており、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」(文部省,1999)という目標を掲げている。小学校・中学校においても発達段階に合わせたほぼ同様の目標を掲げている。これは集団活動を通じて全人的な人間完成を目指す[生きる力]の育成を助けるものであり、精神面の成長を狙ったものであると考えられる。とくに高等学校の行事においては集団の一員としての自覚や、自主的な態度、などを形成できる環境・場面が、小学校・中学校に比べ多くあるのではないかと。

現在までに行われている先行研究では、学校行事の効果的な進行の方法や、学校行事を利用して子どもの精神的発達を促進する目的のもの(樽木,2005)は多く存在するが、従来通り行われている学校行事がどのような効果を及ぼすかについて、あまり多くの研究はされていない。岡崎ら(1995)は学校行事が人格形成に及ぼす影響について文化祭を取り上げ、

中高一貫教育校の中高生を対象に調査をしており、主に生徒を参加意欲によって類型化し、参加の形態（積極性など）、満足したか、などについて問う選択式の質問項目を設け、その項目を選択した理由について調査している。その調査において、積極的な参加をする生徒は充実感・価値・おもしろさを求めていること、友人との協力・交流が満足感に影響を与えていること、などを報告している。また樽木・石隈（2006）でも文化祭を取り上げ、学級劇における中学生の小集団の体験の効果について研究を行っており、小集団の発展を強く意識した生徒は自己活動の認知、他者との相互理解を高めたことを報告している。角谷（2005）は、中学生の部活動への取り組みが学校生活への満足感をどのように高めるかについての縦断的な研究をしており、部活動で積極的に活動できていることは、その時点での学校生活への満足感の高さと関連すること、さらに学校生活への満足感を時期を追って高めることにつながることを示唆している。樽木・石隈（2006）や角谷（2005）の研究は集団での体験活動が精神的な変化を与えることを示唆しているといえる。

紹介した3つの調査では文化祭、部活動という特別活動を取りあげており、学級など、活動単位としては比較的小集団で展開されるものであった。そこで、本研究では、先行研究で取り上げられておらず、比較的大集団で展開される体育祭を取り上げ、第1の目的を、生徒が体育祭で得られる特定の精神的な変化を量的に捉え、どのような要因によって違いが出るのかを探索的に調べることにする。

特別活動と学習の関連

文部省（1999）は「特別活動は、生徒の自主的、実践的な活動を基盤とするが、これらを充実したものに日常の各教科・科目など学習で獲得した知識・技能、能力や態度を生かさなければならぬ。また逆に、特別活動で培われた自主的・実践的な態度が、各教科・科目の学習に影響を与える。」と、特別活動の意義について述べている。これはつまり、特別活動が「生きる力」の育成のみならず、教科教育の一助となるということを示唆している。このことは果たして本当なのであろうか。近藤・石井（1997）は、スポーツにおける自己効力が高い者は一般的な自己効力も高いことを述べ、課題固有の自己効力と一般性自己効力の関連を明らかにしており、固有の課題で得られた自己効力が他の課題の自己効力と関連する可能性があることを示唆している。角谷（2005）は、部活動での積極性が高いほど、学業コンピテンスが高いことを明らかにし、集団活動への積極性と学業コンピテンスという異なる領域の関連を示し、集団で活動する特別活動と学習面との関連を示唆した。

これらの研究は、ある1つの領域で得られたものがそれとは異なる領域で得られたものと関連するという可能性、また特別活動と学習面の関連の可能性は示しているが、特別活動の効果として学習に影響が見られたことを示すものではない。本研究の第2の目的は体育祭によって得ら

れる精神面の変化が学習へ与える影響を明らかにすることとする。ただ、学習に影響があるとの示唆があるとはいえ、特別活動が直接に知識や学力に影響を及ぼすとは考えにくい。特別活動が精神面の成長を狙ったものであるのだから、学習への影響も精神面であろうと考えられる。本研究では学習に関する精神的な側面のひとつとして学習意欲という面への影響を考えることにする。

体育祭で得られる精神的な変化には様々なものが想定される。例えば、「体育祭をやり遂げた」というような達成感情、「自分で積極的に体育祭に参加した」というような自発的精神、「学校の一員として体育祭を行っている」というような所属感情などが挙げられる。本研究では第2の目的として、学習意欲への影響を考えるため、学習意欲へ影響を与えるであろうものに着目する。

これまでの学習意欲に関する概念化と本研究で取り上げる学習意欲

学習意欲は大きく2つに分けることができ、学習の目的が、学習そのものである内発的学習意欲と、報酬や承認などの学習以外のものである外発的学習意欲がある。本研究は特別活動を通しての自己変化にともなう学習意欲への影響を考えるので、このうち内発的学習意欲を考える。本研究では、特別な断りがない限り、内発的学習意欲のことを学習意欲と呼ぶことにする。

学習意欲については、これまで内発的動機づけという言葉で、様々な観点から概念化されてきた。White (1959) はコンピテンスという概念を提唱し、その視点は、後の動機づけの概念化に多くとり入れられた。White は特に、環境との効果的な相互交渉の結果得られる効力感の充足を求め、動機づけをエフェクタンス動機づけと呼び、その結果として学習が生起するとした。波多野・稲垣 (1971) は内発的動機づけの概念化をおこない、内発的動機づけの構成要素を認知的動機づけと社会的動機づけとした。さらに認知的動機づけは拡散的好奇心と特殊的好奇心に区別されるとした。Deci (1975) は自己の行為の因果律の所在の認知に焦点をあてて概念化をおこない、内発的動機づけは有能さと自己決定への欲求に基づく生来的な動機づけであり、「内発的に動機づけられた行動とは、人がそれに従事することによって、自らが有能で自己決定的であると感知することのできるような行動である」と定義している。また、手段性-目的性の観点から Young (1961) は、内発的動機づけと外発的動機づけを区別し、外発的動機づけは活動に外的な誘因を必要とするのに対し、内発的動機づけは活動それ自体に価値が置かれるとし、自己目的性によって内発的動機づけを概念化した。

学習意欲の測定にあたり、本研究では、これまでの概念をできるだけ多く取り上げ、包括的な学習意欲測定尺度を作成し、使用する。項目については桜井・高野 (1985) が作成した内発的-外発的動機付け測定尺度の項目を参考に作成する。この尺度は内発的動機付けに関する多様な概

念化を取り上げ、知的活動場面から項目を作成し構成されている。Gottfried (1985) も包括的な内発的動機づけの概念化を行っているが、今回の研究では日本で作成された桜井・高野のものを参考にすることにした。桜井・高野は挑戦・知的好奇心・達成・認知された因果律の所在・内生的-外性的帰属・楽しさ、の6つの観点から項目を作成し、その6つの観点を下位尺度としてひとつの尺度を構成している。項目は、それぞれの下位尺度について5問ずつの計30項目があり、十分な信頼性、妥当性の検討がされている尺度である。今回の研究ではその尺度から項目を精選し、下位尺度を設けない次元の学習意欲測定尺度を作成する。

集団活動獲得感情の構成

そして桜井 (1997) は、Deci & Ryan (1985) の仮定した有能さ (competence)、自律性 (autonomy)、関係性 (relatedness) という3つの基本的欲求から、学習意欲のみなもととして、有能感、自己決定感、他者受容感を挙げている。有能感とは「自分はやろうと思えば勉強ができる」というような気持ち、自己決定感とは「自分のことは自分で決めていく」というような気持ち、他者受容感とは「自分はまわりの人から受容されている」というような気持ちである。

本研究ではこの3つの感情に注目し、体育祭という集団活動で得られるものに合致したものを設定し、測定する。具体的には、有能感は獲得達成感とし、「体育祭で自分の所属集団の中で役割を果たせた」というような気持ち、自己決定感は、「体育祭では自分で決定し行動できた」というような気持ち、他者受容感は獲得連帯感とし「体育祭を通じて所属集団の一員となれた」というような気持ちと定義することにする。本研究では、この獲得達成感、自己決定感、獲得連帯感をまとめて集団活動獲得感情と呼ぶことにする。これを測定する集団活動獲得感情測定尺度については、集団生活を通じて「どの程度そう思えたか」について問うものを作成する。そして、個別の場面を設定しないように配慮し、作成する。

本研究の目的

以上より、本研究では、集団活動獲得感情測定尺度・学習意欲測定尺度を作成し、第1に獲得される集団活動獲得感情に影響する要因について探索的に調べることを、第2に体育祭で得られた集団活動獲得感情の高低と、体育祭前後の学習意欲との関連を調べることを目的とする。

集団活動獲得感情に影響する要因として、本研究では、性別、満足感、所属チームの成績、応援団への参加有無、の4つを取り上げる。性別は様々な研究で差を調べられている要因であり、本研究でも性別による差を見ることにする。満足感は体育祭全体に対する満足を聞くものである。岡崎らは、文化祭では満足を感じている生徒たちの多くが、友人との協力・交流があったことをその理由としてあげていることを報告している。これは文部省が特別活動の目標で述べている「集団や社会の一員として

よりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度」、が生徒たちの満足感と関連があることを示唆するものである。所属チームの成績と応援団の参加有無は、調査をおこなった研究参加者が所属する高等学校の体育祭の内容と関連する要因である。本研究の協力校における体育祭では、学年を解体し、各学年2クラスずつで4つのチームを構成する。その4チームで競い合い、競技により得られる得点の合計点で優勝・準優勝・3位・4位を決定する。このように決定されたものを所属チームの成績とする。桜井（1997）のコンピテンス動機づけの発達モデルによると、良い成績を得られたことを成功、成績が良くなかったことを失敗ととらえたなら、所属チームの成績が悪い群に比べ、成績の良い群は高い集団活動獲得感情を得られることが予想される。また各チームはそれぞれ応援団という体育祭の中心的な自由参加の集団を構成する。この集団への参加の有無が応援団の参加有無である。応援団は応援合戦という種目に参加し、応援団ごとに練習したダンスを含む演技を披露する。体育祭のプログラムは応援合戦を除き、すべてが競技種目であり（順位や数字を競う）、ダンスを含む演技を披露する応援合戦のみ唯一それから外れた種目といえる。応援団への参加は、単純に集団活動獲得感情を得られる機会が多くなること、また、演技を披露するという特殊性があり、その演技の準備を通した連帯感の高まりや、演技をやり終えたという達成感情の高まりなどにより、集団活動獲得感情を高めることが予想される。

集団活動獲得感情と学習意欲の関連を検討するにあたり、本研究では、体育祭で得られた集団活動獲得感情の高低で研究参加者を分類し、体育祭前後での学習意欲の変化を群間で比較する。集団活動獲得感情の高低により、体育祭前後で学習意欲の変化の様子が異なる場合は、体育祭で得られる感情が学習意欲に何らかの影響を与えたと考えられる。一方、現場の数名の教師が言うには、現場の教師は、学校行事直後の授業にやりにくさを感じ、生徒たちに学習意欲の低下が起こっているのではないかという意見があり、それを学習面への悪影響ととらえ学校行事に対して否定的な教師もいるという。体育祭前後に学習意欲に低下がみられれば、現場の教師の意見を支持する結果となる。しかし、体育祭前後で学習意欲に高まりがみられれば、学校行事が学習面へポジティブな影響を与えることの証明になり、縮小傾向にある学校行事の価値を見直すきっかけになるであろう。

予備調査

目的

本研究で使用する学習意欲、集団活動獲得感情（獲得達成感、自己決定感、獲得連帯感）の尺度を作成する。

方法

質問紙

質問紙は以下の①～③で構成された。ただし、①、③、②の順番で質問紙を構成した。

①フェイスシート：性別・応援団への参加の有無について回答を求めた。

②学習意欲測定尺度：項目は高野・桜井（1985）の質問紙の6つの下位尺度から2項目ずつ（それぞれ1つは逆転項目）を選び、合計12項目（表2参照）とした。回答については「以下の質問にあなたはどの程度当てはまりますか？回答例のように自分に当てはまるものの番号に○をして下さい。ただし、授業中以外の時間（例えば家にいる時など）のことと考えて下さい。」との教示の後、4件法（1. 当てはまる、2. やや当てはまる、3. あまり当てはまらない、4. 当てはまらない）で求めた。得点は順に4点、3点、2点、1点とし、逆転項目については得点を逆にした。

③集団活動獲得感情測定尺度：予備調査に先立ち、項目を作るために、H大学大学院生10名に獲得達成感・自己決定感・獲得連帯感に関する自己の体験を自由記述にて回答してもらった。

その回答をもとに、獲得達成感についての質問12項目（表3参照）、獲得連帯感に関する質問を6項目（表4参照）作成した。回答については「2005年に行われた体育祭についてのあなたについて質問します。以下の回答例のように、当てはまるものの番号に○をして下さい。所属集団とはクラス・係・団などあなたが思いつく、あなたが所属していた集団なら何でもかまいません。」との教示の後に4件法（1. そう思う、2. ややそう思う、3. あまりそう思わない、4. そう思わない）で求めた。得点は順に4点、3点、2点、1点とし、逆転項目については得点を逆にした。なお、獲得達成感・獲得連帯感の全18項目の質問項目の順序はランダムに配置した。

自己決定感については質問項目が集まらなかったため、質問を1項目とし、自分がどの程度、自己決定できたかという11段階評価で回答を求めた。教示は「あなたは体育祭に関わることの中で、自分で決定することができる場面（出場する競技決めや、体育祭当日の自由がきくときの

行動など、すでに決められている場面〔集合時間など〕以外すべて)において、どの程度自分で決定しましたか。以下の回答例のように、自分の位置づけにいちばん近い数字に○をつけて下さい。他の人とは、友人を含む、自分以外の人とします。」とした。

調査時期

2006年2月3日

研究参加者

研究参加者は大阪府公立高等学校3年生58名(男子23名、女子35名)であり、有効回答率は100%であった。

手続き

調査は上述の質問紙でホームルームの時間に担任教師の指導のもと、クラス単位で実施された。なお、実施時間は約5分程度であった。

結果

予備調査で使用した各尺度の記述統計量は表 1 のようになった。

学習意欲測定尺度の信頼性

学習意欲についての質問 12 項目（表 2 参照）に対する Cronbach の α 係数は、.73 であった。4 項目を削除したところ、 $\alpha = .78$ という値が得られた。よって、8 項目の合計得点を学習意欲の指標とする。

集団活動獲得感情測定尺度の信頼性

獲得達成感についての質問 12 項目（表 3 参照）に対する α 係数は、.93 という値が得られた。そのうち、回答に偏りが見られた 1 項目、獲得達成感の測定に適していないと考えられる 1 項目の合計 2 項目を削除した場合も、同じく $\alpha = .93$ となった。よって、ここで得られた 10 項目の合計得点を獲得達成感の指標とする。

獲得連帯感についての質問 6 項目（表 4 参照）に対する α 係数は、.83 であり、作成した 6 項目は高い内的一貫性を有すると考えられた。

集団活動獲得感情の構成要素である獲得達成感、自己決定感、獲得連帯感のそれぞれの相関を調べた（表 5 参照）。獲得達成感と獲得連帯感の相関は $r = .83$ ($p < .01$) であった。しかし自己決定感と、獲得達成感、獲得連帯感の相関はどちらも有意ではなかった。自己決定感は、獲得達成感および獲得連帯感とは異なる側面を測定していると考えられる。よって本調査では、自己決定感を除き、獲得達成感・獲得連帯感の計 16 項目の合計得点を集団活動獲得感情の指標とすることとした。

表 1 予備調査で使用了各尺度の記述統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	α 係数
学習意欲	30.0	4.7	18	43	0.78
獲得連帯感	20.6	3.4	12	24	0.83
獲得達成感	36.8	7.7	20	48	0.93
獲得自己決定感	5.4	2.3	0	10	
集団活動獲得感情	57.4	10.7	33	72	

表 2 学習意欲測定尺度の質問項目

質問
いろいろなことを、進んで勉強したい。
* 学校でおそわる勉強だけしていればよいと思う。(R)
誰かに言われなくても、勉強する気になる。
* 誰かに言われて、しかたなく勉強することが多い。(R)
* 問題が難しいと、すぐ誰かに教えてもらおう。(R)
問題が難しくても、自分の力で解こうと頑張る。
頭を使う、難しい問題のほうが好き。
答えが、簡単に出せる問題のほうが好き。(R)
勉強は、楽しくない。(R)
新しいことを勉強するのは、とても楽しい。
* よい成績をとるために、勉強する。(R)
楽しいから、勉強する。
* のついた項目を本調査では削除、(R)は逆転項目

表 3 獲得達成感の質問項目

質問項目
* 満足できた。
自分は活躍した。
自分は役に立てた。
自分は役割をうまくこなせた。
自分は以前と比べて成長した。
自分の中にあっただ目標が達成できた。
自分の行動はうまくいかなかった。(R)
自分は、所属集団の中で協力することができた。
自分は、所属集団の中での役割をこなすことができた。
自分は、所属集団での活動を通じて得られたものがあった。
自分は、所属集団に対して貢献できた。
* 自分の所属集団は、目標を達成した。

* のついた項目を本調査では削除、(R) は逆転項目

表 4 獲得連帯感の質問項目

質問項目
孤独を感じた。(R)
仲間とのつながりを感じた。
学校の一員として一体感を感じた。
自分は仲間と様々な感情をわかちあえた。
自分の所属集団には、まとまりがあった。
自分の所属集団の中では、助け合い、協力があった。

(R) は逆転項目

表 5 集団活動獲得感情の下位尺度間の相関係数

	1	2	3
1. 獲得達成感			
2. 獲得連帯感	.825**		
3. 自己決定感	.123	-.010	

** $p < .01$

本調査

目的

第1に集団活動獲得感情に影響する要因について探索的に検討する。要因としては性別、満足度、所属チームの成績、応援団への参加有無の4つについて検討する。

第2に集団活動獲得感情の高群と低群では、体育祭の前後で学習意欲の変化に違いがあるかについて検討する。

方法

研究参加者

研究参加者は大阪府の公立高等学校の学生2年計295名(男性114名、女性181名)。

全研究参加者295名のうち、調査項目の1つでも回答していない研究参加者、明らかな虚偽回答を含むと判断された研究参加者を分析の対象外とした。最終的に277名が有効研究参加者(有効回答率93.9%)となった(男性103名、女性174名)。

調査時期

調査は質問紙で行われ、体育祭実施前の2006年4月27日に1回目、体育祭実施後の2006年6月8日に2回目の調査を実施した。この2回の調査の実施日は、学習意欲への影響が予測される学校の定期テスト(中間テスト、期末テスト)との期間が同程度になるように設定した(図1参照)。

質問紙

質問紙は以下の①～④で構成された。ただし、1回目の調査では①、②のみで構成し、2回目の調査では①、③(④を含む)、②の順番で質問紙を構成した。

①フェイスシート：調査1回目では出席番号のみ回答を求め、調査2回目では出席番号・性別・応援団への参加の有無について回答を求めた。

②学習意欲測定尺度：予備調査で作成した項目を使用し回答法を変えた。さらに細かく検討するため、回答は予備調査時の4件法に「どちらでもない」を加えて5件法(当てはまる、やや当てはまる、どちらでもない、あまり当てはまらない、当てはまらない)で求めることとした。得点は順に5点、4点、3点、2点、1点とし、逆転項目については得点を逆にした。また、順序効果の影響を考え、質問項目の配置順序を変えた4種類の質問紙を作成し、カウンターバランスをとった。

③ 集団活動獲得感情測定尺度：予備調査で作成した項目を使用し、回答法を変えた。さらに細かく検討するため、回答は予備調査の4件法に「どちらでもない」を加えた5件法（そう思う、ややそう思う、どちらでもない、あまりそう思わない、そう思わない）で回答を求めることとした。得点は順に5点、4点、3点、2点、1点とし、逆転項目については得点を逆にした。また順序効果の影響を考え、質問項目の配置順序を変えた4種類の質問紙を作成しカウンターバランスをとった。

④. 満足度：予備調査で集団活動獲得感情の尺度を作成したときに除外した「満足できた。」の項目を、集団活動獲得感情の尺度の中に設置して、満足度を問う項目として使用した。回答方法は、集団活動獲得感情測定尺度と同じ5件法とし、分析にあたっては「そう思う」と回答したものを満足群、それ以外の回答をしたものを不満足群と分類した。

手続き

計2回の調査は上述の質問紙でホームルームの時間に担任教師の指導のもと、クラス単位で実施された。なお実施時間は調査1回目が3分程度、調査2回目が5分程度であった。

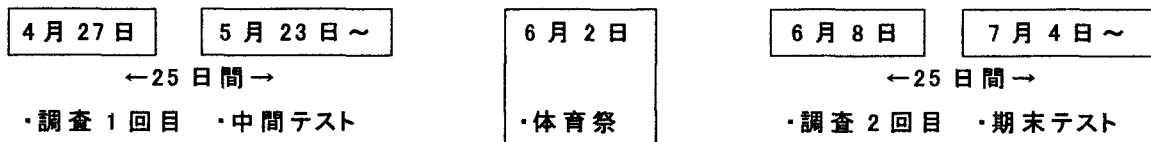


図1 調査日程

結果

本調査で使用した各尺度の記述統計量は表6のようになった。

「学習意欲測定尺度」「集団活動獲得感情測定尺度」の信頼性の検討

学習意欲・集団活動獲得感情の各尺度についての α 係数は、学習意欲（体育祭前）.79、学習意欲（体育祭後）.78、集団活動獲得感情.93となり、尺度として信頼性が確認された。

表6 本調査で使用した各尺度の記述統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	α 係数
学習意欲:体育祭前	21.8	5.8	8	38	0.79
学習意欲:体育祭後	22.0	5.8	8	39	0.78
集団活動獲得感情	61.7	11.3	23	80	0.93

集団活動獲得感情に影響する要因の検証

4つの要因が集団活動獲得感情に影響しているかどうかを検討するにあたり、性別、満足感、所属チームの成績、応援団への参加有無の4つの要因で被験者を分類し、人数分布を調べた。その結果、人数分布に偏りが認められ、満足感の要因と応援団への参加有無の要因は独立でないことがわかった（表7参照）。従って、満足感と応援団への参加有無の要因を同時に分析することはせず、3要因の分散分析を2つ実施することにした。さらに全研究参加者のデータを用いて分散の等質性の検定を行ったところ、分散が等質でない実験条件が存在したため、外れ値をとった1名を除外し、計276名のデータを用いることとした。

表 7 性別、満足感、所属チームの成績及び応援団の参加有無の各群における人数内訳

応援団へ参加					
性別		男		女	
満足感		満足	不満足	満足	不満足
所属チームの成績	優勝	12	3	15	2
	準優勝	3	3	22	6
	3位	11	7	17	3
	4位	9	4	19	6
応援団へ不参加					
性別		男		女	
満足感		満足	不満足	満足	不満足
所属チームの成績	優勝	5	10	9	11
	準優勝	3	8	9	11
	3位	4	9	8	11
	4位	3	9	7	18

集団活動獲得感情の得点について性別(2)×所属チームの成績(4)×応援団への参加有無(2)の被験者間3元配置分散分析を行った。各群の平均値を表8に示す。その結果(表9参照)、応援団への参加有無($F(1, 260) = 63.038, p < .01$)、の主効果と、応援団の参加有無と所属チームの成績の交互作用($F(3, 60) = 4.759, p < .01$)が有意であった(いずれも $MSe = 95.163$ 。)。続いて、性別(2)×所属チームの成績(4)×満足感(2)の3元配置分散分析を行った。各群の平均値は表10に示す。その結果(表11参照)、満足感($F(1, 260) = 124.760, MSe = 80.483, p < .01$)の主効果が有意であった。

そこで、応援団の参加有無要因と所属チームの成績要因の間の交互作用について下位検定を行った。下位検定の各群の平均値を表12に示す。結果、準優勝群において5%水準、優勝群、3位群、4位群において0.1%水準で有意差がみられ、応援団への参加群は応援団への不参加群に比べて平均得点が高いことが明らかになった。また応援団への不参加群において5%水準で有意差がみられ、優勝群、準優勝群は4位群に比べて平均得点が高いことが明らかになった。

表 8 性別、所属チームの成績及び応援団への参加有無の各群についての
集団活動獲得感情の平均値

性別	応援団への参加有無	所属チームの成績	平均値	標準偏差	度数
男性	応援団へ参加	優勝	64.7	11.6	15
		準優勝	63.0	8.1	6
		3位	64.1	6.7	18
		4位	70.2	8.0	13
	応援団へ不参加	優勝	60.4	9.8	15
		準優勝	57.8	8.5	11
		3位	52.2	13.4	13
		4位	49.3	11.3	12
女性	応援団へ参加	優勝	66.5	8.3	17
		準優勝	67.2	7.6	28
		3位	67.2	8.0	20
		4位	68.0	7.4	25
	応援団へ不参加	優勝	57.7	11.6	20
		準優勝	61.5	13.0	19
		3位	58.3	8.9	19
		4位	54.0	11.4	25

表 9 性別、所属チームの成績及び応援団への参加有無要因についての
集団活動獲得感情の分散分析表(3元配置:対応なし)

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
性別	325.328	1	325.328	3.419	n.s.
応援団への参加有無	5998.888	1	5998.888	63.038	p<.01
所属チームの成績	231.282	3	77.094	0.810	n.s.
性別	23.836	1	23.836	0.250	n.s.
* 応援団への参加有無					
性別	265.205	3	88.402	0.929	n.s.
* 所属チームの成績					
応援団への参加有無	1358.749	3	452.916	4.759	p<.01
* 所属チームの成績					
性別	298.942	3	99.647	1.047	n.s.
* 応援団への参加有無					
* 所属チームの成績					
誤差	24742.482	260	95.163		
修正総和	34025.576	275			

表 10 性別、満足感及び応援団への参加有無の各群についての
集団活動獲得感情の平均値

性別	満足感	所属チームの成績	平均値	標準偏差	度数
男性	不満足	優勝	54.8	8.5	13
		準優勝	56.3	8.0	11
		3位	52.9	10.4	16
		4位	51.2	12.8	13
	満足	優勝	68.5	8.3	17
		準優勝	65.8	5.7	6
		3位	65.7	8.9	15
		4位	69.8	8.5	12
女性	不満足	優勝	52.8	9.3	13
		準優勝	55.4	8.0	16
		3位	58.7	9.9	14
		4位	53.2	11.1	24
	満足	優勝	66.6	8.7	24
		準優勝	69.8	7.9	31
		3位	65.2	8.5	25
		4位	68.2	7.0	26

表 11 性別、満足感及び所属チームの成績要因についての
集団活動獲得感情の分散分析表(3元配置:対応なし)

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
性別	20.278	1	20.278	0.252	n.s.
所属チームの成績	51.545	3	17.182	0.213	n.s.
満足感	10041.146	1	10041.146	124.760	p<.01
性別	185.408	3	61.803	0.768	n.s.
* 所属チームの成績	23.527	1	23.527	0.292	n.s.
性別	451.108	3	150.369	1.868	n.s.
* 満足感	239.596	3	79.865	0.992	n.s.
性別					
* 所属チームの成績					
* 満足感					
誤差	20925.692	260	80.483		
修正総和	34025.576	275			

表 12 所属チームの成績及び応援団への参加有無の
各群における集団活動獲得感情の平均値

所属チームの成績	応援団	平均値	標準偏差	度数
優勝	参加	65.7	9.9	32
	不参加	58.8	10.8	35
準優勝	参加	66.4	7.7	34
	不参加	60.1	11.5	30
3位	参加	65.7	7.4	38
	不参加	55.8	11.2	32
4位	参加	68.8	7.6	38
	不参加	52.5	11.4	37

体育祭で得られた集団活動獲得感情と学習意欲との関連

集団活動獲得感情の高群と低群の間、および体育祭前後の学習意欲の平均得点の間に違いがあるかを検証するために、学習意欲の得点について集団活動獲得感情の高低(2)×時期(2)の二元配置分散分析を行った。集団活動獲得感情の高低は被験者間要因、時期は被験者内要因である。中央値により群分けをし、集団活動獲得感情高群は139人、集団活動獲得感情低群は138人となった。各群の平均値を表12に示す。結果は表13のようになり、集団活動獲得感情要因($F(1, 275) = 2.926, MSe = 58.572, n.s.$)、時期の要因($F(1, 275) = 0.582, MSe = 9.034, n.s.$)、に主効果はみられず、交互作用もみられなかった。

表12 集団活動獲得感情の高群と低群における体育祭前後での学習意欲の平均値

集団活動獲得感情	時期	平均値	標準偏差	度数
高群	体育祭前	22.4	5.9	139
	体育祭後	22.6	5.8	
低群	体育祭前	21.3	5.8	138
	体育祭後	21.4	5.8	

表13 集団活動獲得感情の高群と低群における体育祭前後での学習意欲についての分散分析表(二元配置:対応なし・対応あり)

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
被験者間				
集団活動獲得感情高低	171.406	1	171.406	2.926 n.s.
誤差	16107.410	275	58.572	
被験者内				
時期	5.255	1	5.255	0.582 n.s.
時期 x 集団活動獲得感情高低	0.252	1	0.252	0.028 n.s.
誤差(学習意欲)	2484.485	275	9.034	
全体	18768.808	553		

考察

集団活動獲得感情に影響する要因

集団活動獲得感情に影響する要因を探索的に検討した。分散分析の結果、満足群は不満足群に比べ高い集団活動獲得感情を得られていること、応援団への参加群は、所属するチームの成績に関係なく不参加群に比べ高い集団活動獲得感情が得られており、集団活動獲得感情の高さは各所属チーム間で差がないこと、応援合戦の不参加群では所属チームの成績に影響を受け、優勝・準優勝したチームが4位チームに比べ高い集団活動獲得感情を得られたことが明らかになった。

満足群が不満足群より集団活動獲得感情を高く得られたのは、岡崎ら(1995)の調査結果を一致するところがある。生徒が満足感を得られる学校行事は、生徒が達成感情や連帯感情を高く得られる学校行事であることがいえる。

応援団への参加有無に関しては所属チームの成績に関係なく、参加群が不参加群に比べ集団活動獲得感情が有意に高い。これは、単純に所属集団が増えることによって、獲得達成感、獲得連帯感の得られるであろう場面が増えたことが考えられる。さらに、応援団が応援合戦という特殊な種目に参加することが関連しているのではないだろうか。一定の準備期間を通して獲得連帯感を高め、そして応援合戦の演技をやり遂げたことによって高い獲得達成感が得られたのではないだろうか。

応援団への不参加群では、優勝・準優勝チームは4位チームに比べ有意に集団活動獲得感情が高かった。これは、応援団への不参加群の集団活動獲得感情は、所属チームの成績に影響を受けているといえる結果である。これは、成功・失敗が集団活動獲得感情に影響を与えていることを明らかにしている。しかし、応援団への参加群は、所属チームの成績による影響がなく、同程度の集団活動獲得感情を得られている。つまり、応援団への参加群は、成功・失敗の影響を受けていない。これは応援団への参加が所属チームの成績より集団活動獲得感情に強い影響があったことを裏付けているのではないか。この点から考えると、応援団への参加は、単純な所属集団としての場面増加だけでなく、応援合戦という特殊な種目への参加することで、所属チームの成績に影響されないほど強く集団活動獲得感情に影響を与えたと考えられる。

体育祭で得られた集団活動獲得感情と学習意欲との関連

集団活動獲得感情と学習意欲との関係を検討した。分散分析の結果、集団活動獲得感情は学習意欲には影響を与えていないこと、また、体育祭前後で学習意欲には変化がないことが明らかになった。

第1に、現場の教師の感じていた学校行事後の学習意欲の低下を否定する結果となった。実際には体育祭前後で学習意欲は変化しておらず、

学校行事実施による学習意欲の低下への不安は考える必要がないといえる。現場の教師が感じている学習意欲の低下は、本研究で測定した意識レベルの学習意欲ではなく、疲れなどに伴う行動レベルの学習意欲ではないか。現場の教師たちが学校行事直後に感じる学習意欲の低下は、疲れなどの外的な要因による一時的な行動レベルの学習意欲の低下であり、その外的な要因がなくなったときになくなくなると考えられる。

第2に、本研究で取り上げた体育祭において、文部省が特別活動の意義として考えている学習への影響は、学習意欲という面に関して影響がなかった。しかし、この結果は他の特別活動や学校行事について同様といえることではなく、他の学校行事が学習意欲へ影響を与えないことを証明するものではない。体育祭という比較的大きな集団で行う学校行事に関しては領域固有性がみられ、学習意欲という面に影響はなかったが、角谷（2005）が部活動への積極性と学習コンピテンスの間に関連を示しているように、小集団を活動の中心とする学校行事の学習面への効果は検討の価値が残されているであろう。

総合考察

本研究で学校行事と学習意欲を中心に研究を行い、体育祭は学習意欲への影響がないことが明らかになかったが、それが学校行事の重要性を損なうものではない。学習意欲への影響がなく学校行事を行えるということが明らかになったのは、学校行事を行うことで想定されていた悪影響を一つ除外できたということと捉えることができるであろう。また、集団活動獲得感情に影響する要因を探索的に検討し、体育祭全体に対する満足感、所属チームの成績、応援団への参加有無の影響があったことは、学校行事そのもの以上に、学校行事の内容の重要性を示唆するものである。本研究では、特に満足感を得られたり応援団に参加した生徒は、高い集団活動獲得感情を得られている。つまり、生徒が満足感を得られる学校行事の実施や、生徒が準備をして何かを作りあげる所属集団のある学校行事を実施することは、高い集団活動獲得感情を得られる可能性があるのである。従って、学校行事は、ただ実施するのではなく、生徒の精神面の成長を考え実施されることで、高い価値を得られることであろう。

今後の課題

本研究では1つの高等学校を対象としているため一般化には限界がある。今後、より多くの学校を対象とした研究が必要とされるであろう。また、本研究では、生徒が本来持っている有能感・他者受容感を調査していない。しかし、それらは体育祭で得られる集団活動獲得感情と学習意欲の両方に関連があると考えられる。ゆえに、それらを調査に加えた研究が望まれる。そして、本研究で除外した体育祭で得られる自己決定感を取り上げ、学習意欲との関連についての研究も望まれる。本研究では、集団活動獲得感情の構成要素としては、獲得達成感・獲得連帯感と異なる側面として考え除外することにしたが、桜井（1997）が学習意欲のみなもととして取り上げているように、体育祭で得られる自己決定感が学習意欲に影響する可能性がある。

最後に、特別活動の効果に対する研究が少ないことはひとつの問題として挙げられる。各学校で例年のように行われている文化祭、体育祭、修学旅行、などの学校行事について様々な角度から研究し、学校行事の効果を調査することは学校教育にとって意味のあることではないだろうか。本研究は一行事、一側面を取り上げた研究であり、様々な学校行事の確かな意義、確かな効果を検討していくことは、現在のように、縮小傾向にある学校行事を実施していく価値を確認する上で重要となるであろう。

文献

- Deci, E. L. 1971 Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 105-115.
- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic motivation*. New York: Plenum Publishing Co. (E. L. デシ 安藤延男・石田梅男 (訳) 1980 内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ 誠信書房)
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985 *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Plenum Publishing Co.
- Gottfried, A. E. 1985 Academic intrinsic motivation in elementary and junior high school students. *Journal of Educational Psychology*, 55, 631-645.
- 近藤文良・石井久美子 1997 自己効力の一般性と課題特殊性 滋賀大学教育学部紀要Ⅱ, 47, 9-21.
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 1971 発達と教育における内発的動機づけ 明治図書
- 文部省 1999 高等学校学習指導要領解説 特別活動 編 東山書房
- 岡崎勝博他 1995 学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について 筑波大学付属駒場中・高等学校研究報告, 35, 191-228.
- 桜井茂男 1997 学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる 誠信書房
- 桜井茂男・高野清純 1985 内発的—外発的動機付けの測定尺度の開発 筑波大学心理学研究, 7, 43-54.
- 鹿毛雅治 1994 内発的動機づけ研究の展望 教育心理学研究, 42, 345-359.
- 角谷詩織 2005 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか 発達心理学研究 16, 26-35.

樽木靖夫 2005 中学生の仲間集団どうしのつき合い方を援助する学校行事の活用 教育心理学年報, 44, 156-165.

樽木靖夫・石隈利紀 2006 文化祭での学級劇における中学生の小集団の体験の効果 教育心理学研究, 54, 101-110.

上淵寿(編) 2004 動機づけ研究の最前線 北大路書房

White, R. W. 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. Psychological Review, 66, 297-333.

Young, P. T. 1961 *Motivation and emotion*. New York: Wiley

付録

体育祭後に使用した質問紙

問 1 : 集団活動獲得感情測定尺度

問 2 : 学習意欲測定尺度

学習意欲の調査および、

体育祭における達成感・連帯感の自己評価についての調査

この調査は、学習意欲と、先に行われた体育祭における達成感・連帯感を自己評価によって調べるものです。

結果は統計的に処理し、あなた一人の回答のみを問題にしたり、公表することはありません。ご協力よろしくお願い致します。

No. ()

あなたの性別は？ (男 、 女)

あなたは応援団に参加しましたか？ (はい 、 いいえ)

(調査者)

兵庫教育大学大学院

大学院生 宅間 涉

問 1

2006年6月2日に行われた体育祭についてのあなたについて質問します。以下の回答例のように、当てはまるものの番号に○をして下さい。

回答例 一生懸命頑張った。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

1. 自分は活躍した。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

2. 自分は役に立てた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

3. 孤独を感じた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

4. 自分は役割をうまくこなせた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

5. 自分は以前と比べ成長した。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

6. 仲間とのつながりを感じた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

7. 自分の中にあつた目標が達成できた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

8. 自分の行動はうまくいかなかった。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

9. 学校の一員として一体感を感じた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

10. 満足できた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

以下の問題文の所属集団とはクラス・係・団などあなたが思いつく、あなたが所属していた集団なら何でもかまいません。

11. 自分は所属集団の中で協力することができた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

12. 自分は所属集団の中で役割をこなすことができた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

13. 自分は所属集団での活動を通じて得られたものがあった。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

14. 自分は所属集団に対して貢献できた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

15. 自分は仲間と様々な感情をわかちあえた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

16. 自分の所属集団には、まとまりがあった。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

17. 自分の所属集団の中では、助け合い、協力があつた。

(1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらでもない 4. ややそう思わない 5. そう思わない)

問2

以下の質問にあなたはどの程度当てはまりますか？回答例のように自分に当てはまるものの番号に○をして下さい。ただし、授業中以外の時間（例えば家にいる時など）のことと考えて下さい。

回答例 予習をしています。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

1. 楽しいから勉強する。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

2. 頭を使う難しい問題のほうが好き。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

3. 問題が難しくても、自分の力で解こうと頑張る。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

4. 誰かに言われなくても、勉強する気になる。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

5. いろいろなことを、進んで勉強したいと思う。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

6. 新しいことを勉強するのは、とても楽しい。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

7. 答えが簡単に出せる問題のほうが好き。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

8. 勉強は楽しくない。

(1. 当てはまる 2. 少し当てはまる 3. どちらでもない 4. あまり当てはまらない 5. 当てはまらない)

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。